

2017年10月8日(日)

説教:「このわたしが仰ぎ見る」

聖書:ヨブ記19:1~29

今週、73年目の「十・十空襲」の日を迎える。沖縄戦が始まる半年前のこと。その日、日本軍はまったくの無警戒の中、早朝から夕方近くまで米軍の戦闘機、延べ1400機の襲来を受け、那覇は9割が破壊され、焼け野原となり、沖縄のほぼ全地域、北は奄美大島から南は宮古、石垣島までの南西諸島のほぼ全域にかけて爆撃が加えられた。死者600人を超え、負傷者は900人を超えた。

この「十・十空襲」のあと沖縄に配備されていた関東軍は沖縄を去ることになる。このまま沖縄にいても壊滅に至ると判断してか？その後、沖縄の戦力は各段に低下し、沖縄の少年少女が学徒隊としてよりいっそう頼らざるを得なくなった。沖縄を守るよりも、本土決戦に備えたということ、大本営を守ること、天皇を守ることに重点が置かれたということだ。関東軍が沖縄を去る時、沖縄が見捨てられて行くという感は否めなかった。非常に辛く、悲しく、悔しい思いがあったと言う。沖縄戦はまさに日本に捨石にされていく。沖縄はこれでもかこれでもかと裏切られ、見捨てられるという経験をする。

このヨブ記では、ヨブ自身がこれでもかこれでもかと裏切られ、見捨てられる。ヨブ自身は神にも見捨てられたかのように神の沈黙の中に置かれる。ヨブの苦難は沖縄の苦難の歴史と重なるように思える。

ヨブは、「わたしは知っている／わたしを贖う方は生きておられ／ついには塵の上に立たれるであろう。この皮膚が損なわれようとも／この身をもって／わたしは神を仰ぎ見る」(25, 26節)という。ヨブは、神に向き合い、苦難に向き合う。ヨブは、苦難の中に立たされながらも、「わたしは神を仰ぎ見る」という。誰かが、ではなく27節「このわたしが仰ぎ見る」というのである。苦難の時とは、よりいっそう神は沈黙しているように感じるであろう。しかし、神は生きておられる。「このわたしが仰ぎ見る」時、わたしの苦難の解放が始まって行く。誰かがではなく、苦難のただ中にある“あなた”が、神を仰ぎ見るところから始まって行く。(神谷)